

---



---

 学 会 記 事
 

---



---

 第2回新潟外科系領域  
 バイオメディカル研究会

日 時 平成3年6月14日(金)  
 午後6時～午後8時  
 会 場 ホテル新潟 3階  
 飛翔の間

## I. 一般演題

## 1) 肺外科領域におけるベリプラストPスプレーの使用経験

中山 健司	・	広野 達彦	
大和 靖	・	相馬 孝博	
吉谷 克雄	・	土田 正則	
江口 昭治			(新潟大学第二外科)
小池 輝明			(県立がんセンター)
			(新潟病院胸部外科)

患者の高齢化に伴い気腫性変化の強い症例も増加し、肺外科領域では術後 air leak に悩まされることがある。我々は術中に肺の切断断端或は縫合部よりの air leak 部にベリプラストPスプレーを塗布したところ leak が消失し術後管理が容易になった症例を経験したので報告する。

症例1は72歳の女性、肺結核腫の診断で右肺部分切除を行った。不完全分葉の葉間部より air leak を認めたため同部にベリプラストPスプレーを塗布した。

症例2は66歳の男性、狭心症合併肺癌の診断で冠動脈バイパス術と右上葉切除術を同時に行った。中、下葉との剝離面より air leak を認め同スプレーを塗布した。

症例3は76歳の女性、再発肺癌の診断で右 S6 区域切除を行った。切断断端よりの air leak 部にスプレーを塗布した。

ベリプラストPスプレーは sealing 効果が確実に裏面への塗布も可能であり、肺手術後の肺胞瘻防止に有効と思われた。

## 2) 肺癌縦隔リンパ節郭清後、縦隔への fibrin glue 塗布による術後胸水量減少効果の検討

山口 明	・	相馬 孝博	(国立療養所西新潟)
			病院外科)

肺癌手術後の多量胸水は、ドレイン抜去時期を遅延さ

せ、感染機会の増大、低蛋白血症をもたらす要因となる。こうした合併症を予防する目的で fibrin glue を縦隔リンパ節郭清部位に塗布し、術後胸水量が減少するかどうかを検討した。胸膜癒着がなく、合併切除を要さず、術後 air leak が無かった R2 以上の縦隔リンパ節郭清を施行した肺癌患者で検討した。fibrin glue 塗布群9例、非塗布群10例で、ドレイン抜去時期、全胸水量を比較したが有意差は無かった。fibrin glue の使用量が少なかったか、あるいは、塗布群に手術侵襲の大きい症例が多かった可能性があり、再検討を要すると思われた。

## 3) ベリプラストP使用による心膜癒着防止効果の実験的検討

諸 久永	・	大関 一	(新潟大学第二外科)
江口 昭治			

近年、再手術例の増加に伴い、心膜癒着に対して、集学的研究の必要性が求められているが、今回、ベリプラストによる心膜癒着予防が可能かを動物実験にて検討した。積極的に癒着促進を図った後、塗布および散布法にて検討した。非塗布群では 3W, 4W 例に繊維性の強い癒着と、心外膜・心膜側からの著しい細胞浸潤、血管新生、強い fibrosis を認めた。ベリプラト群では、肉眼的にゲル状・fibrin 様物質にて心外膜側は覆われ、著しい心膜癒着は認めず、徒指にて容易に剥がれた。組織的には、心膜・心外膜間には loose な fibrin net が形成されるも、著明な細胞浸潤や血管新生は認めなかった。人工素材縫着部では、異物反応や器質化が生じているも、心膜との著しい組織反応は認めなかった。以上から、ベリプラスト塗布方法によっては、心膜癒着防止効果は期待可能と考えられた。

## 4) 子宮頸部円錐切除術の切断端処理について

児玉 省二	・	本間 滋	(新潟大学産婦人科)
金沢 浩二	・	田中憲一	学教室)

当科では、昭和63年以降の子宮頸部の円錐切除術は CO<sub>2</sub> レーザによる手術を行い、切断端は開放としてきた。切断端の出血例には、Microfibrillar Collagen Hemostat を使用した。レーザー手術の利点としては、非照射部位の組織損傷が少なく、残存部位からの出血が少なく、滲出液が少なく感染が起きにくく、創傷治癒が早いこと、などがあげられる。円錐切除術の適応は、診断目的として頸管内病変で病巣の把握が困難例および初